

岡崎ホスピスケアを考える会通信

2004年1月

23号

事務局：橋詰 0564-53-3100 小野 0564-24-8518 URL <http://www1.ocn.ne.jp/~hospice/>

新年あけまして

おめでとーございませす



「岡崎にホスピスはないですか」と訪ねてきた人がいました。娘さんは嫁ぎ先にあるホスピスで亡くなられたそうです。次の言葉が印象的でした。

「ホスピスでの十日間は本当に幸せでした」。息苦しいという娘さんは、アロマオイルでマッサージを受け、呼吸法を教えてもらい「ほら、楽になったでしょう？」という看護師さんになぜいた。

「今でもその呼吸法ができるんだわ」という彼女の言葉に、周りのみんなが娘さんと共に苦しみ、マッサージに癒され、一緒に同じ呼吸をされていた十日間を想像できました。

幸せとは、
華やかさの中だけでなく
状況の良し悪しでもなく
どんなときでも

共にいてくれる人の存在に気づいたとき、しみじみ感じられるものだと思います。

幸せな二〇〇四年でありますように。

橋詰清子

11月の勉強会報告

11月15日「主治医の上手な見つけ方」岡崎市民病院 柴田睦ソーシャルワーカー

市民病院の良心といわれる相談室の柴田睦さん、明るく歯切れのよい口調で分かりやすく話されました。「どこで生きてゆくか、どこで死を迎えたいのかは、自分で選べるのです」と言われ、そのためには日頃から家族や医師との対話の中で自分の意思をはっきりと伝えておくこと。また大病院で病気を診てもらい専門医と、家庭医として日常的に診てもらい二人主治医制の必要性を教えてくださいました。
(柴田)

[感想文から]

- ・自分自身もしっかり勉強して、主治医の先生にきちんと質問できるようにしたいなと思いました。
- ・上手な主治医の見つけ方は、自分自身が大切だと思いました。
- ・ソーシャルワーカーという存在を知ること、病気になったときの不安、悩みが軽くなったような気がします。
- ・転院の後は自宅で介護と思っていますが、参考になりました。

◆ご案内

勉強会

- ・ 2月20日(金) 10時～12時 アイプラザ岡崎勤労福祉会館第4会議室
「次年度計画」 どのようなことをしたいか、希望を出し合ひましょう。
- ・ 3月13日(土) 10時～14時 アイプラザ岡崎勤労福祉会館研修室
「総会と交流」 総会の後交流を行います。

手縫い (毎月第2火曜日) 県立愛知病院機能訓練室

2月10日(火) 10時～12時 3月9日(火) 10時～12時

つどい (毎月第3木曜日)

2月19日(木) 10時～12時半 アイプラザ岡崎勤福社会館
3月18日(木) 10時～12時半 覚照寺 (0564-51-0916) 羽根小学校北 木村易先生参加

◆運営委員会からアンケートのお願い

「ホスピス」「緩和ケア」についてのアンケートを用意しました。2004年度年間計画の参考にしたいと思いますので、ご意見をお聞かせください。

“手縫い”の報告

愛知病院・市民病院・国際病院などに毎月雑巾などをお届けしています。

みなさんから頂いたたくさんの残り毛糸で「友愛の家」の手編みサークルの方たちが、素敵なひざ掛けを編んでくださいました。いろいろな色の毛糸が編み込まれた、それぞれが世界に一つのひざ掛けです。今まで200枚以上が国際病院、愛知病院、岡崎市民病院、なのはな宛、などで活躍しています。私たちの“つどい”の席でも温かい小道具になっています。

1本の毛糸が、風のおくりものになりました。



(小野)

“つどい”の報告

患者・家族・遺族の集まりです

介護や終末期のことは、以前から頭の隅に引っかかっていた。そんな時に永六輔氏の講演があり、この会の存在を知りました。早速入会し、昨年1月にあった“つどい”に初めて参加しました。知人が誰もいないこともあってかなり緊張して行ったのですが、世話係の方に温かく迎えられ、ホッとしたことを覚えています。

“つどい”参加の動機は少し不純で、皆さんのお話をどこまで深く聴けるか、聞く耳を持ちたいというところがありました。考えてみると、参加者から一歩身を引いた、傲慢な態度だったと思います。皆さんの実体験に裏打ちされたお話は、私の甘い考えを見事に打ち砕いていました。つらい思いを言葉にするまでには、計り知れない苦しみがあったことと思います。その苦しみを押しつけて語られるお話は他人事でなく、自分の問題として考えることがいっぱいありました。心の学びの多いのが、この“つどい”だと思います。

(奈倉)



◆安城更生病院緩和ケア科部長 伊藤正也先生の講演会に参加して (11月20日)

緩和ケアの目標は、「出来る限り快適な生活を送ること」。その為には、患者さん本人の欲求をみたくする必要があります。また患者さんの多くは“何のために生きるのか”“苦しみに意味はあるのか”“死後はどうなるのか”という問題に加え、さらに身体的苦痛、精神的苦痛、社会的苦痛をかかえてしまうというお話でした。その他にがん患者の心理的プロセスとして、否認(自分がこの病気になるはずがない)→ 怒り(よりによって何故自分が)→ 取引(神様にお願ひ)→ 抑うつ→ 受容 という図を示され、病気告知からその真実を受入れるまでの心の動きが理解できました。このプロセスは病気の時だけでなく、目の前に起こった事実を受入れられない時の心の動きとよく似ていると思いました。こうして整頓してみるとよく理解でき、心理学的にも勉強になりました。

(中村)

◆「緩和ケアにかかわる人のためのエンカウンター・グループ」に参加して

日時：11月21日(金)～24日(月) 場所：「グループ・インほりのや」山梨県山中湖の近く

4日間の集まりを終えて、自分が「言葉」を発することに非常に臆病になっているのを感じました。仕事に受けた相手の何気ない言葉に、深い傷を負った人の話。無言が続く中で何か言ってあげたいのだけれど、発した言葉でまたその人を傷つけてしまうのではないかとこの恐れ。何かいい言葉はないかと模索しながら、もどかしい思いを感じていました。

参加されている看護師さんに一つ質問をしました。「同じ病室に容態の良い人も悪い人もいる。良い人への話はしやすいけれど、悪い人に話をするときはどうされるのですか?」。「数人の人が同居されている場合、患者さんは人の話をじっと聞きながらひたすら自分の順番を待っています。そんな時私は、今自分が向かっている患者さんに全神経を注いでその人のために話をします。向きを変えると今度は、今日の前にいる人に向かって話をします。他の人は関係ありません。」看護師さんの迫力にびっくりしました。そして胸がジーンと熱くなりました。

相手の人を大切に思う心があれば、言葉はそんな「ことば」になって出てくるのだ。何かを言ってあげたいのではなく、相手の人を思う心が大切であることを知りました。

(難波)

